

第3回連携大学教員職務意識調査の結果 (2010年9月実施)

はじめに

本調査は、2009年12月に行なった「授業評価アンケートに関する教員意識調査」、2010年3月に行なった「授業改善に関する教員意識調査」に引き続き、FD活動を進める上で必要不可欠な、大学教員の業務負担の現状を把握し、職務への充足感を高めるための方策を探ることを目的として実施しました。

なお、本調査では放送大学ICT活用・遠隔教育センター（旧メディア開発教育センター）のWEBアンケートシステムREAS（リアルタイム評価支援システム）を利用して実施しています。また、質問項目（12）の定性項目のデータ分析は、テキストマイニングソフト「True Teller」（野村総研）を利用しています。

1. 基礎データ

回答者数	194名（回答率 約8.4%）
性別	男性 69%、女性 31%
年齢	30代 18.5%、40代 32.5%、50代 29.4%、60代以上 19.6%
職位	教授 45.9%、准教授 30.4%、専任講師 18.0%、助教・助手 4.1%、 非常勤講師 0.5%、その他 1.0%
授業経験年数	～5年未満 16.5%、5年以上～10年未満 22.7%、10年以上～20年未満 30.9% 20年以上 29.9%

2. アンケートの回答（定量項目）

（1）定量項目の分析

各項目に関して、以下の2点を簡潔に述べる。

結果：回答割合が85%以上のとき「ほとんどの教員」、70～85%のとき「多くの教員」、50%弱～70%のとき「半数の教員」とした。

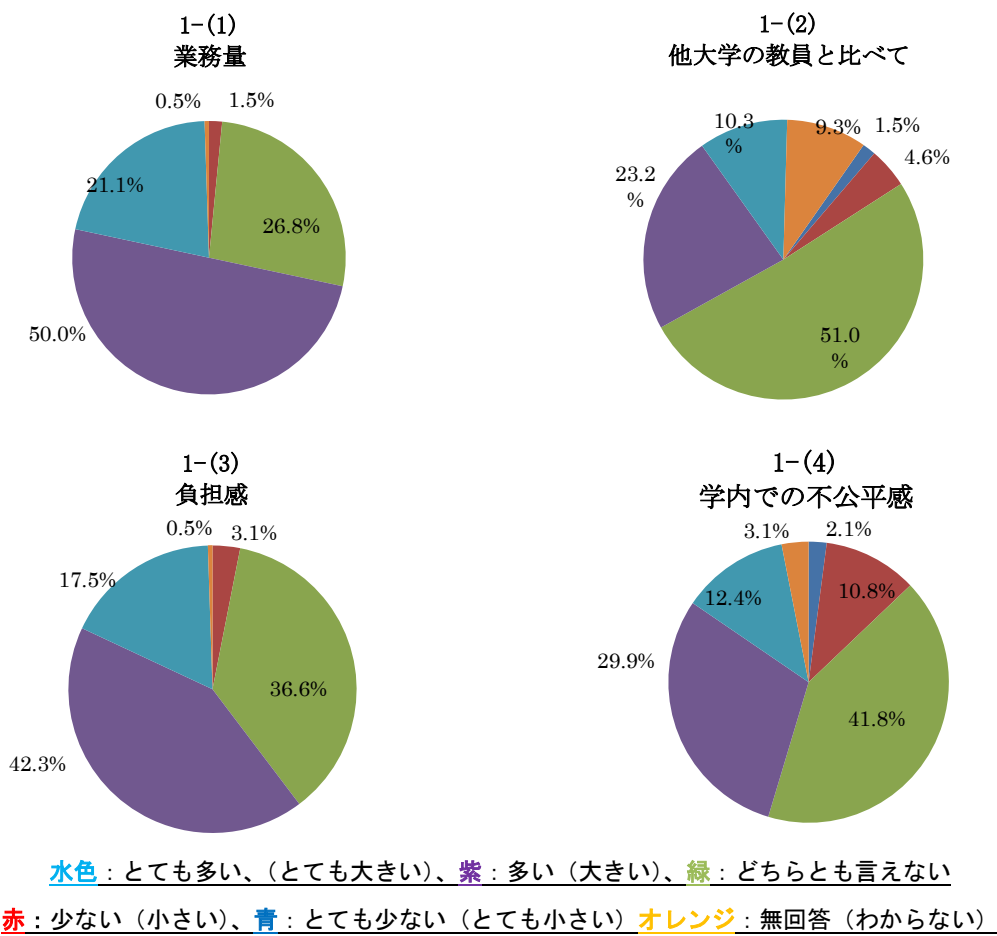
検討点：質問項目に関して、本WGによる今後の検討が望まれる点（必要な項目のみ）

〔教育面の評価〕

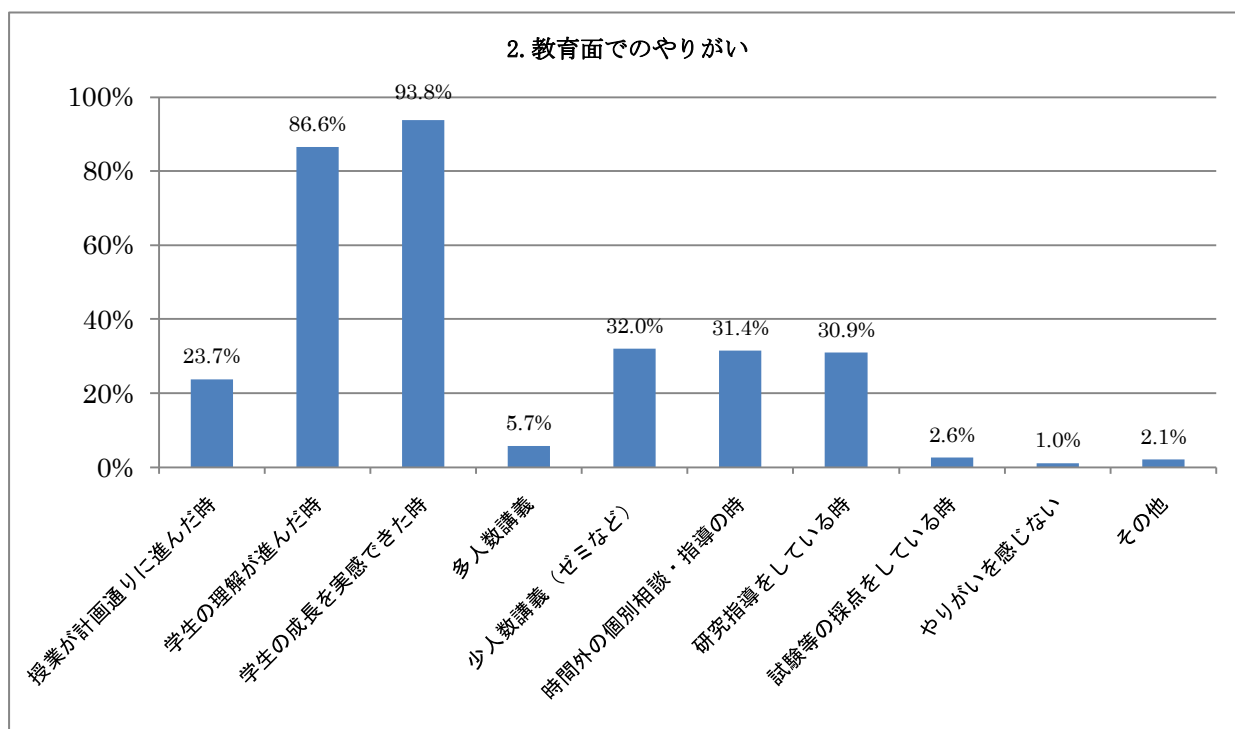
1. 現在の授業、教育面の業務量について、あなたはどのように思いますか？

結果：業務量は71.5%の教員が「とても多い」「多い」と回答しており、他の教員との比較では「とても多い」「多い」は33.5%である。ただし半数が「どちらとも言えない」と回答している。同様に負担感も「とても大きい」「大きい」は半数強（59.8%）であり、学内での不公平感は42.3%が抱いている。当然のことではあるが、業務量に対する認識と負担感はほぼ一致している。

検討点：学内の不公平感の実態把握が必要



2. あなたは授業（教育面）で、どのような時に“やりがい”を感じますか？

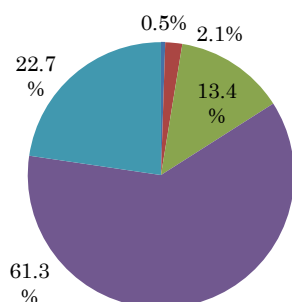


結果：やりがいを感じていない教員は1%（2名）だけであり、ほとんどの教員は「学生の理解が進んだ時」（86.6%）、「学生の成長を実感できた時」（93.8%）にやりがいを感じている。「少人数講義（ゼミなど）」「時間外の個別相談・指導の時」「研究指導をしている時」はいずれも30%台であり、必ずしも多数ではない。

検討点：「学生の理解」「学生の成長」を促す実践例（場面）の紹介、方法論の提示。

3. 全般として、ご自身が担当されている授業（教育面）に“やりがい”を感じていますか？

3. 授業にやりがいを感じている



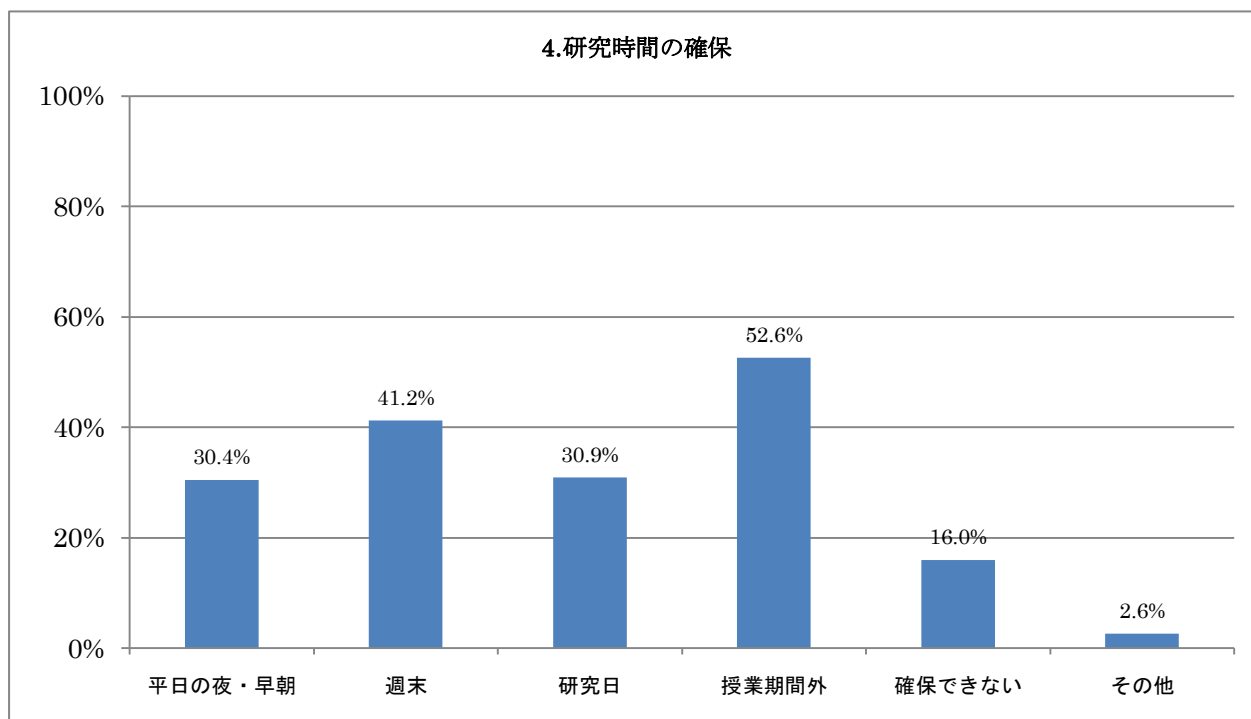
結果：84.0%の教員がやりがいを感じており、そのうち「強く感じている」も22.7%にのぼっている。

水色：強く感じている、紫：感じている、緑：どちらとも言えない

赤：感じていない、青：全く感じない、オレンジ：無回答

〔研究面の評価〕

4. あなたは研究時間をいつ確保していますか？（複数回答可）

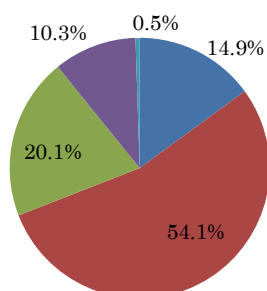


結果：「授業期間外（長期休暇）」（52.6%）が最も多いが半数に止まり、他の回答も30～40%台である。「確保できない」との回答も16.0%あり、他業務や家事等のスキ間をぬって研究している実態が見える。

検討点：研究日、研究休暇の実態把握。

5. 研究時間はご自身にとって必要なだけ取れていると思いますか？

5. 研究時間は必要なだけ取れているか

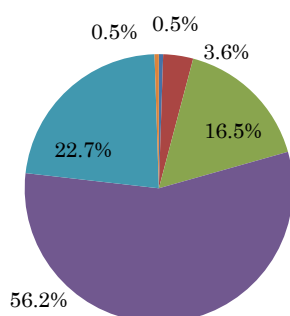


結果：「全く取れていない」「取れていない」が69%であり、多くの教員にとって研究時間の確保は切実な要求である。

水色：十分に取れている、**紫：**取れている、**緑：**どちらとも言えない
赤：取れていない、**青：**全く取れていない、**オレンジ：**無回答

6. 全般として、ご自身の研究に“やりがい”を感じていますか？

6. 研究にやりがいを感じている



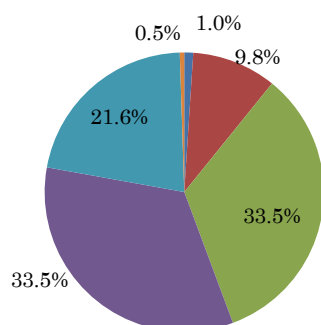
結果：多くの教員（78.9%）は、自身の研究に“やりがい”を感じており研究したいと望んでいる

水色：強く感じている、**紫：**感じている、**緑：**どちらとも言えない
赤：感じていない、**青：**全く感じない、**オレンジ：**無回答

〔学内業務の評価〕

7. あなたは、ご自身の学内会議、事務等の業務量について、どう感じていますか？

7. 学内会議、事務等の業務量

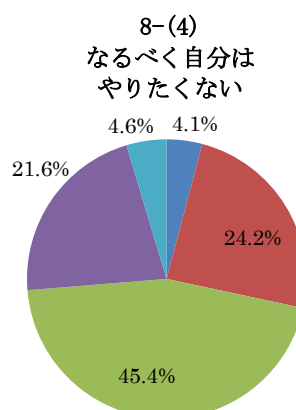
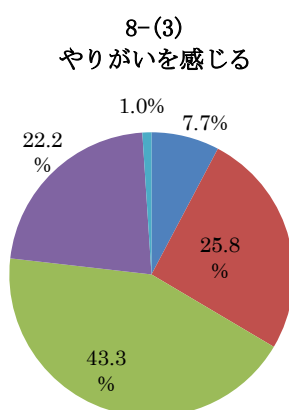
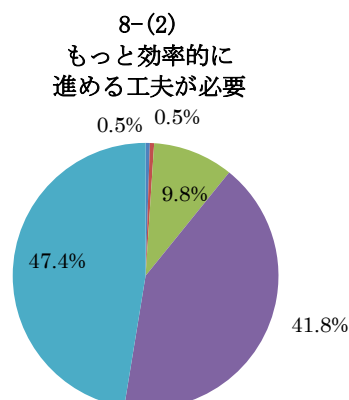
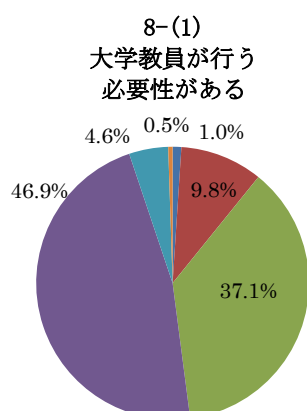


結果：過半数（55.1%）の教員が「とても負担が重い」「負担が重い」と回答しているが、1/3（33.5%）の教員は「どちらとも言えない」としており、業務量の偏りが見える。

検討点：役職教員の実態把握

水色：とても負担が重い、**紫：**負担が重い、**緑：**どちらとも言えない
赤：負担ではない、**青：**全く負担ではない、**オレンジ：**無回答

8. 学内会議、事務等の業務に関する以下の意見について、あなたはどのように思いますか？現在の業務量を前提として回答してください。



水色：強く思う、紫：思う、緑：どちらとも言えない

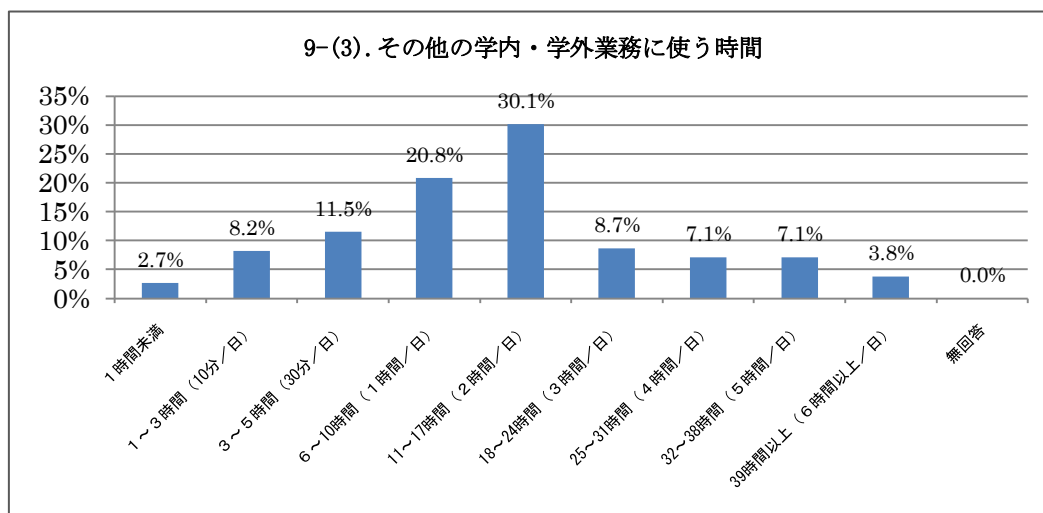
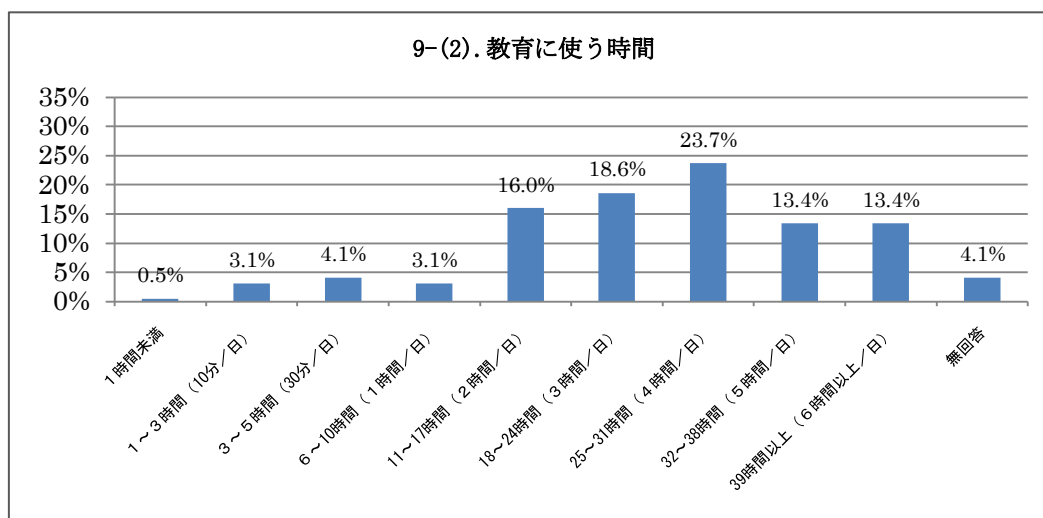
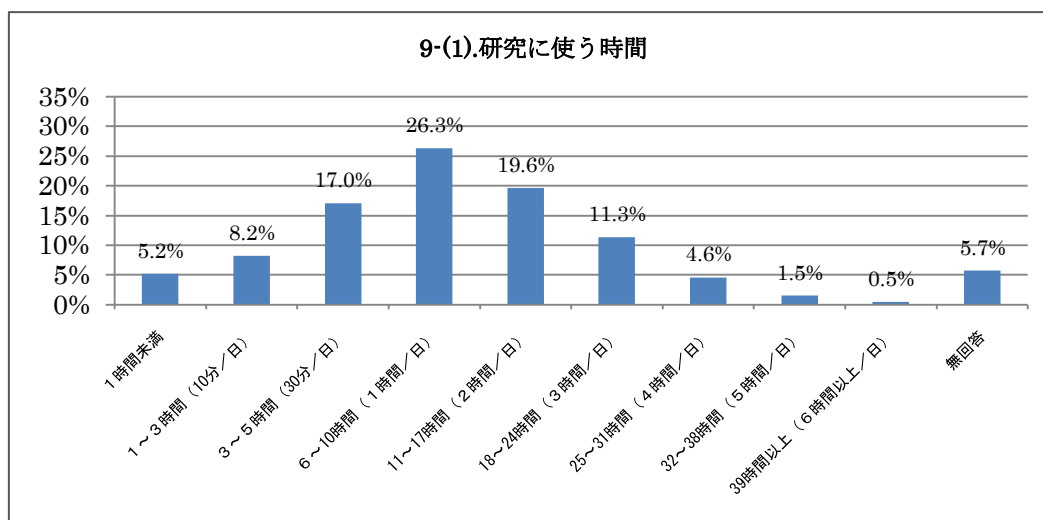
赤：思わない、青：全く思わない、オレンジ：無回答（わからない）

結果：過半数（51.5%）の教員が「大学教員が行う必要がある」と考えていて、「やりがいを感じる」との回答も1/4（23.2%）ほどある。「なるべく自分はやりたくない」も約1/4（26.2%）であり、学内業務に関する意識は分散している。多くの教員は「もっと効率的に進める工夫が必要」（89.2%）といった内容面、運営面の工夫を求めている。

検討点：学内会議、事務等を効率的に進める工夫

9. ご自身の1週間の職務時間(※)で、それぞれの業務にどのくらいの時間を使っているでしょうか？

※過去1年間における平均的な1週間の時間数を大まかに出してみてください。

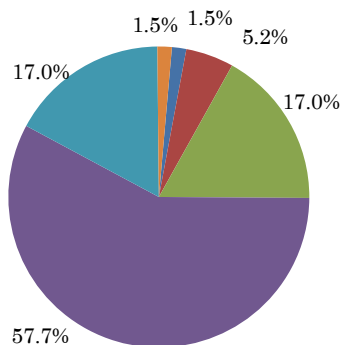


結果：研究時間は1日1時間、教育・授業時間は1日4時間、その他の学内・学外業務に使う時間は1日2時間弱であり、教育に使う時間が教員の業務時間の半分以上を占めている。

検討点：教育に1日6時間以上かけているとの回答も13.4%あり、実態の把握が必要である

10. 全般として、あなたは大学教員という職に満足していますか？

10.大学教員という職に満足しているか



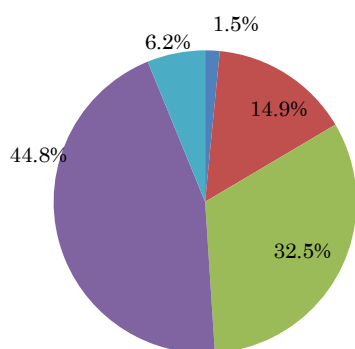
結果：多くの教員（74.7）が満足しており、していない教員は少数（6.7%）である。

水色：とてもしている、紫：している、緑：どちらとも言えない

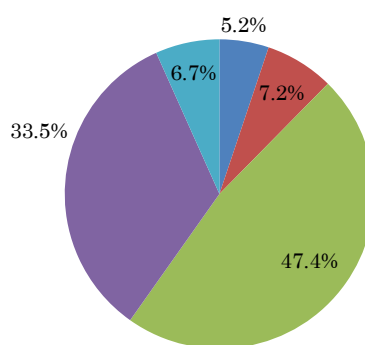
赤：していない、青：全くしていない、オレンジ：無回答

11. あなたは現時点で、大学教員としての職務に関してどのように感じていますか。それぞれについて最もあてはまるものにチェックしてください。

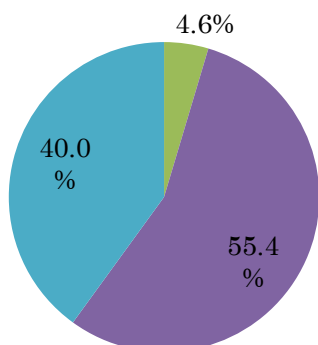
11- (1)
教育にかかる時間



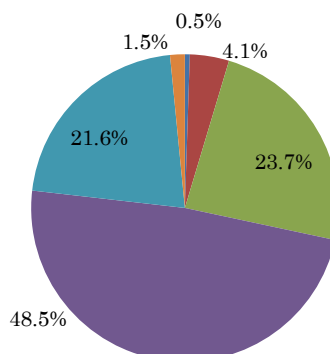
11- (2)
教育面での研修機会



11- (3)
研究にかかる時間

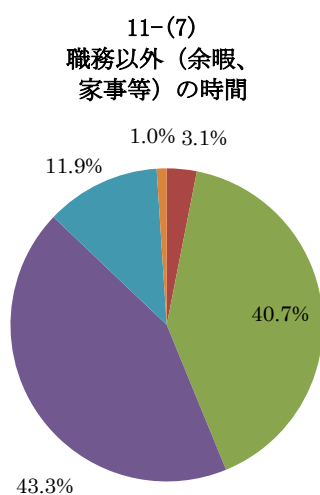
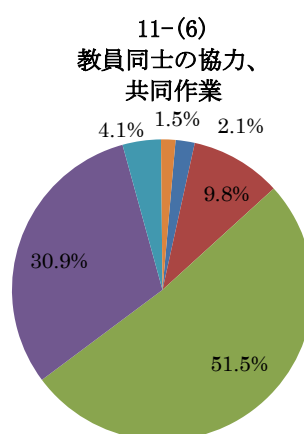
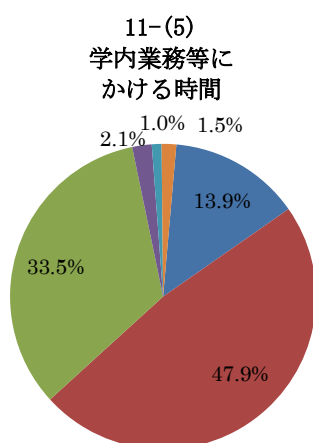


11- (4)
研究面での研修機会



水色：とても増やしたい、紫：増やしたい、緑：どちらとも言えない、赤：減らしたい

青：とても減らしたい、オレンジ：無回答



水色：とても増やしたい、紫：増やしたい、
緑：どちらとも言えない、赤：減らしたい
青：とても減らしたい、オレンジ：無回答

結果：ほとんどの教員（95.4%）が研究時間を増やしたいと感じ、研究面での研修機会を増やしたい（70.1%）と回答している。教育にかける時間（51.0%）、教育面の研修（40.2%）、家事・余暇の時間（55.2%）はいずれも半数程度が希望し、逆に学内業務等にかかる時間は61.8%が減らしたいと感じている。

検討点：研究時間を減らしたいとの回答はゼロだが、教育時間を減らしたいとの回答が16.4%あり、実態把握が必要である。

(3) 因子分析

質問のうち、段階評定の項目のみを対象に、因子分析を行った（最小二乗法、プロマックス回転）。4 因子を抽出し、累積寄与率は 41.3%であった。

因子負荷量

	因子			
	1	2	3	4
1. 現在の授業、教育面の業務量について、				
(1) 業務量	<u>.915</u>	.152	.035	-.060
(2) 他大学の教員と比べて	<u>.825</u>	.058	-.014	-.157
(3) 負担感	<u>.808</u>	.027	-.023	.036
(4) 学内での不公平感	<u>.610</u>	.011	.033	.101
3. 授業に“やりがい”を感じている	.104	.118	<u>.667</u>	-.009
5. 研究時間は必要なだけ取れている	-.255	-.039	.219	<u>-.437</u>
6. 研究に“やりがい”を感じている	.019	-.159	<u>.535</u>	.055
7. 学内会議、事務等の業務量	<u>.535</u>	-.096	-.012	.124
8. 学内会議、事務等の業務に関する以下の意見について、				
(1) 大学教員が行う必要がある	.114	<u>.492</u>	-.096	.027
(2) 業務を軽減する必要はない	.024	.140	.203	.056
(3) もっと効率的に進める工夫が必要	.299	-.086	.164	.201
(4) やりがいを感じる	.129	<u>.652</u>	.101	-.132
(5) なるべく自分はやりたくない	-.097	<u>-.739</u>	.005	.103
10. 大学教員という職に満足	-.027	.081	<u>.718</u>	-.051
11. 大学教員としての職務に関して（増やしたいー減らしたい）				
(1) 教育にかける時間	-.174	.318	.264	.163
(2) 教育面での研修機会	-.167	<u>.651</u>	-.085	.344
(3) 研究にかける時間	.108	-.082	.147	<u>.611</u>
(4) 研究面での研修機会	-.080	.187	-.038	<u>.644</u>
(5) 学内業務等にかかる時間	-.237	<u>.490</u>	-.073	-.322
(6) 教員同士の協力、共同作業	-.008	<u>.476</u>	.215	.160
(7) 職務以外（余暇、家事等）の時間	.145	.267	-.216	.139

因子間相関

	1	2	3	4
1	1.000			
2	-.179	1.000		
3	-.257	.300	1.000	
4	.379	-.121	-.221	1.000

因子負荷量から、各因子は以下のように解釈できる。

- 第1因子：業務の多さ・負担感
- 第2因子：大学業務に対する姿勢
- 第3因子：仕事への効力感と満足度
- 第4因子：研究活動への欲求

第1因子と第4因子には正の相関があり、業務を過多と感じている程度と、もっと研究時間や機会を増やしたいと感じている程度には若干関係がある。

また、第2因子と第3因子にも弱い正の相関があり、大学業務に積極的な考えをもつことと、教育や研究にやりがいを感じ大学教員という職に満足を感じる程度に弱いながら関係がある。

一方、業務の過剰感と、仕事へのやりがいや満足度は独立であると考えられる。

因子得点の比較

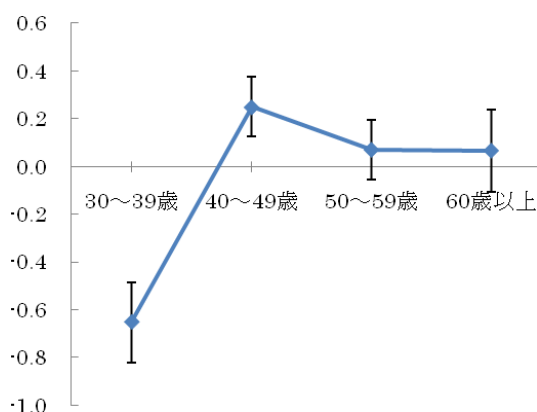
因子得点の推定値を、年齢帯および性別によって比較した。

(年齢帯 4 水準、性別 2 水準の 2 要因分散分析。多重比較は Tukey の HSD 法を使用)

全体に、年齢による違いが見られる。これらは年齢による変化の可能性もあるが、一方で世代による差（コホート差）である可能性もある。

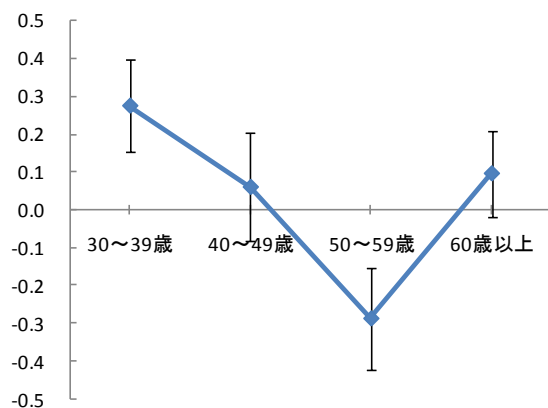
● 第1因子：業務の負担感

年齢帯による差あり。30代のみが低い。
30代は業務が多いという感覚が少ないが、
40代以降で増加する。



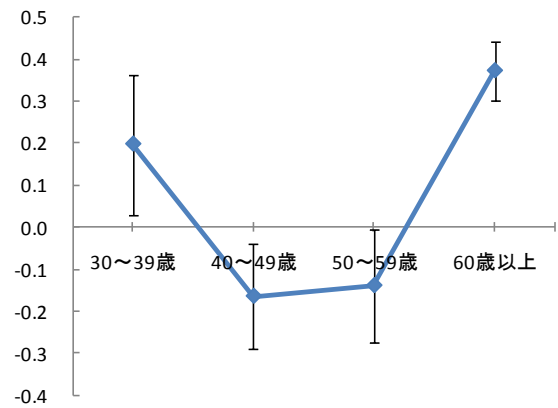
● 第2因子：大学業務に対する姿勢

年齢帯による差があり、30代が50代よりも高い。
若い方が大学業務に熱心で、50代で低下している。



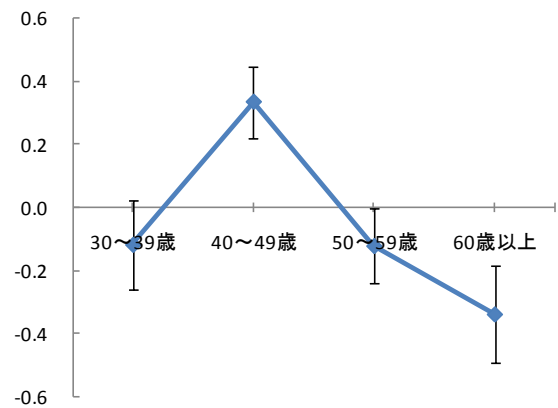
● 第3因子：仕事への効力感と満足度

年齢帯による差があり、40代よりも60代よりが高い。40代では効力感・満足度が低いですが、60代になると上昇する。



● 第4因子：研究活動への欲求

年齢帯による差がみられ、40代は50代および60代よりも高い。40代は他の年代に比べ、もっと研究時間や機会を増やしたいという欲求が高い。40代で業務が増えることと関係しているのかもしれない。



3. アンケートの回答（定性項目）

設問 12「大学教員の満足度（充実感，充足度）を高めるには，どのようにしたらよいと思いますか？」には，全回答者 194 名中 100 名(52%)の回答があった。

（１）頻出単語

年齢帯ごとに，頻出単語を表に示した。ここでは，主な話題を抽出することを目的としたため，内容に直接関わることの多い名詞のみを分析対象としている。

	30 代 (17)	件数	40 代 (32)	件数	50 代 (33)	件数	60 代 (18)	件数
1	教育	8	教育	16	教員	11	教育	10
2	教員	8	研究	13	時間	11	研究	7
3	研究	8	教員	12	教育	10	教員	6
4	時間	4	大学	10	研究	10	大学	6
5	会議	3	業務	9	大学	10	業務	5
6	業務	3	時間	9	事務	6	学生	4
7	バランス	2	学生	8	必要	6	活動	4
8	学内	2	会議	7	学生	5	時間	3
9	環境	2	仕事	6	業務	5	必要	3
10	効率化	2	負担	6	授業	5	FD	2
11	仕事	2	満足度	6	会議	4	サバティカル	2
12	大学	2	事務	5	学内	4	マネジメント	2
13	能力	2	必要	5	自分	4	意欲	2
14	必要	2	学内	4	こま数	3	会議	2
15	評価	2	サバティカル	3	環境	3	学内	2
16	負担	2	改革	3	研究時間	3	機会	2
17	満足度	2	確保	3	社会	3	採用	2
18	両方	2	作業	3	人	3	採用時	2
19			指導	3			雑用	2
20			授業	3			仕事	2
21			制度	3			受講生	2
22			担当	3			充実	2
23			面	3			重要	2
24							職員	2
25							人	2
26							成長	2
27							能力	2
28							満足	2

各年齢帯で 1/3 以上の回答者が記述した頻出単語を見ると，全年齢帯に共通するものとして，「教育」「研究」「教員」がある。ここで，教員満足度を尋ねているので，教員が頻出するのは当然と考えられる。大学教員の職務満足度には，「教育」と「研究」の二者が重要であると考えられているようである。

「大学」という単語も、30 歳代を除いては多くみられている。30 歳代は「大学」への注目が低く、年代が上がると言及が多くなるようである。

また、「時間」という単語が、50 歳代で 1/3 を超えており、また 40 歳代でも比較的多く見られた。50 歳代と 40 歳代は、教育や研究の時間確保（あるいは、会議等の時間の短縮）への要望が多いようである。

その他、「会議」、「業務」「事務」等も割合よくでている。

（２）頻出語の係り受け

上記の頻出単語のうち、特に分析が必要と考えられる単語と係り受け関係のある単語（名詞、形容詞、動詞）を分析した。

全年齢帯で頻出する「教育」および「研究」の２語は、これらの二者が大学教員の職務満足度に重要であることを示すと考えられる。教育と研究を満足に行いたいという希望が非常に多いが、教育に関しては一部に負担を減らしたいという文脈での使用も見られた。

教育

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	業務	名詞	3	3
2	かける	動詞	2	2
3	どのようだ	形容詞	2	2
4	バランス	名詞	2	2
5	活動	名詞	2	2
6	減らす	動詞	2	2
7	行う	動詞	2	2
8	時間	名詞	2	2
9	両方	名詞	2	2
10	ある	動詞	1	1
11	いる	動詞	1	1
12	きめ細かい	形容詞	1	1
13	こなす	動詞	1	1
14	コミットメント	名詞	1	1
15	システム	名詞	1	1
16	ない	形容詞	1	1
17	意味	名詞	1	1
18	影響	名詞	1	1
19	基づく	動詞	1	1
20	気づく（否定）	動詞	1	1

研究

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	かける	動詞	5	5
2	活動	名詞	3	3
3	時間	名詞	3	3
4	バランス	名詞	2	2
5	環境	名詞	2	2
6	業務	名詞	2	2
7	両方	名詞	2	2
8	こなす	動詞	1	1
9	スキル	名詞	1	1
10	する	動詞	1	1
11	ない	形容詞	1	1
12	もつ	動詞	1	1
13	宛てる	動詞	1	1
14	一体化する	動詞	1	1
15	確保	名詞	1	1
16	割く	動詞	1	1
17	基づく	動詞	2	1
18	教育	名詞	1	1
19	業績（否定）	名詞	1	1
20	好きだ	形容詞	1	1

大学

No.	単語	品詞	頻度	件数
1	教員	名詞	15	13
2	ある	動詞	2	2
3	ある（否定）	動詞	1	1
4	運営	名詞	1	1
5	果たす	動詞	1	1
6	改革	名詞	1	1
7	干渉	名詞	1	1
8	期待する	動詞	1	1
9	教育	名詞	1	1
10	経営	名詞	1	1
11	行政	名詞	1	1
12	事務	名詞	1	1
13	取り組み	名詞	1	1
14	収支	名詞	1	1
15	所属する	動詞	1	1
16	上層部	名詞	1	1
17	状況	名詞	1	1
18	成り立つ	動詞	1	1
19	製品	名詞	1	1
20	組織	名詞	1	1

「大学」については、「大学教員」という使い方がもっとも多い。これは、質問文（大学教員の職務満足度を高めるには…）に対応したもので、当然である。その他の用法については係り受けだけでは明確でない。この単語は、30代で少なく、40代以降で多く使用されていたため、各年齢帯での具体的な用例を調べた。その結果、30代および40代では、ほとんどが「大学教員」という用法で「大学」という単語を使っていたが、50代・60代では大学運営や組織、大学の理念等に関連した用法が多くなるという傾向が見られた。

4. 全体を通じて

多くの教員が、大学教員という職にやりがいを感じ、満足感を持っているという実態が明らかになった。一方で、業務量が多すぎるという不満感があり、大学の管理業務を減らせればと考える教員は多いようである。また、研究活動に十分な時間や労力が割けていないと考える教員が多い。しかしながら、こうした不満が多いにもかかわらず、大多数の教員が職にやりがいと満足を感じている。

また、業務に対する姿勢や感じ方には、年代により差が生じていることが明らかになった。これらは、年齢が上がるにつれ、大学の管理業務の負担が増えていくことに関係すると考えられる点が多かった。

ただし、ここでの調査結果は、今回の調査対象者の特性を考慮して、その一般化には若干の注意が必要である。調査対象の連携校は全てが私立大学であり、さらに中小規模の大学が多い。そのことが、教育の重視、少数スタッフで運営していることからくる管理業務等の過重感に繋がっている可能性もある。また、Web調査に自発的に回答してくれた教員だけの結果であることが、高い職務意識に繋がっている可能性もある。

以上